

繪本通俗三國志

初編

二

089236-001-7

122-28

繪本通俗三國志

葛飾 戴斗/画

〔刊年不明〕

DBM-0400



繪本通俗三國志

編

二

東 京 圖 書 館

和書門

水
硯
類

三
六
函

架

號

冊



繪本通俗三國志初編卷之二

目錄明治十年交換

祭天地桃園結義

劉玄德破黃巾賊

安喜縣張飛鞭督郵

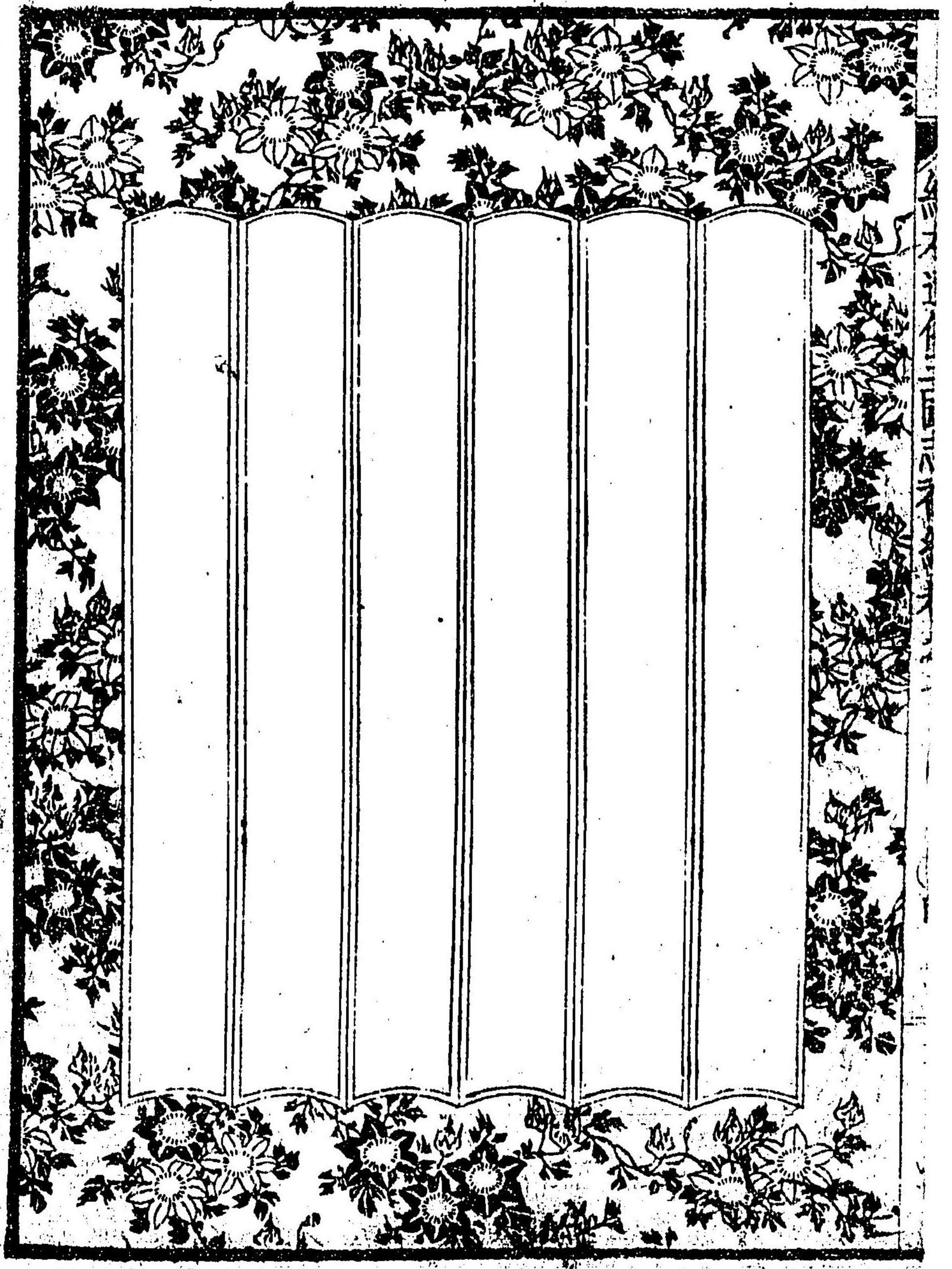
何進謀殺十常侍

繪本通俗三國志初編卷之二

繪本通俗三國志初編卷之二

祭天地桃園結義

熟邦家の貞廢をコルる。今古より今に至るまで治極と乱の別は
 乱入乱極と然る則ち治入る。その理陰陽の消長寒暑の
 往來さるるごとし。そのあひ入る君んとて小多と競業としてあつら
 へるもの入るまじきこと。先舜はあひ病とて死る庸人なる漢
 の高祖三尺の劍を以て割げ。秦の乱を平めひまら哀帝の御
 宇まで二百余年天下を治り。王莽士女位を篡て海内又
 大に乱る。光武は平て後漢の世を興る。光武帝より
 桓帝の御時まで二百余年。光武帝より
 天子と靈帝と。桓帝の薨と受く御年十二歳なり。



位は即ちその將軍實武大傳陳蕃司徒胡廣三人
 相共々天下の政務をばつとて君を輔佐するそのうち内
 宮曹節王甫といふものあり猶倭より君を欺た程は権柄
 をめづらせしむる實武陳蕃あまを誅せんといふ計あり
 ありてその身を害せらるるあり内官いよく志を得て亦
 しひまの朝綱を平し握き建寧二年四月十五日帝温徳
 殿より御ありて御座より著人と仕められたる殿角より
 り狂風あつてその長二十余丈の青蛇梁の上よりびりり
 椅子の上より響りたれが帝よりあまをばつとて地の上より昏倒し
 めの殿中の騒動あつて百官皆上下へ入りて武士をよそ
 さまを扱ひて蛇の消がたきまて雷の鳴ると天

地を碎がれ雷すの大雨おぼしき静り浴陽城中の
 民家千軒壊破せりと死するもの多かりたりあまを希代の
 珍事とあやむるも同じた四年の二月は浴陽をばつとて地震
 禁門省垣あつて倒れ海水あつて登萊沂密の海ち
 り丸圍入家とあつて大波あつて百姓死するもの多かりたりあまを希代の
 事ありて元ありて熹平と号せしあまを邊境付く謀
 りあつて熹平五年ありて光和と号せし諸處怪異
 の事ありて雌雄化と雄とあり六月朔日十余丈の黒氣地より起
 り飛と温徳殿より秋七月玉堂の内より虹あらわれ五原山の岸
 より出づるものありて怪しき事ありてあまを希代の
 事ありて一人の憤り天下の大人ありて勅し群臣を金匱門

洞中ニ張角
南華仙人より
書と授る



張角

南華老仙



南華老仙

論をいひてとる者なく。感ぐく張角が座落りて自ら
其過を讞悔し。みなまごころは承復も。張角これより大賢
良作とせし。二百余人の弟子を以て方と名づけて病を起し。三
十六の方を立てて大小を分ち皆將軍の名を以て方と名づ
此も大方を行ふ者一万余人。小方を行ふ者六七千人
みる一部の長を立てて蒼天已死。黃夫當立。歳在甲子。天
下大乱といはせし。甲子の二字を以てし。ねく施しよ入
郡縣市鎮宮觀寺院ことごとく。おれを推せし。ふりなり。その
後青の初幽の初徐の初其の初荆の初揚の初宛の初豫の初の初ハ
かくは。大賢良師張角とせし。ぬい貴の鬼神を祀するが如く
あり。張角心の内は非分の望を發し。先大方の馬元義とい

ふ者。金銀を持せ禁裏に入りて。密に十常侍と結を
し。封請徐奉。亦内通りて。封請二人の弟。張梁張
寶を呼び。自ら至り得て。民を以て。今民の心を
取らば。若此とて。乘りて天下を取ると。万民の望を失ふ。願ふ二
人の不意。張梁張寶を元より望む。三月五日。同一
事と起し。唐州といふ弟子。書簡を持せ。禁裏に入
りて。願ふを告ぐ。封請徐奉。亦告ぐ。唐州は
さふふと。直り奉行。事の仔細を
ハ帝入。大將軍何進。命を。馬元義を
生取。首を刎。内を。亦余人を

下一の張角車のあらりきたるを見と。とてやうの兵を
 起し。自ら天公將軍と号し張梁を地公將軍と号し張寶
 を人公將軍と号し。百姓をわはめてつらふ。今漢の運氣とて
 はこと大聖人世の生たる你ホ宜く天の順て太平を樂めと云
 り。四方の民もまもくと奉り集り。黄巾の衆と号し。張角とて
 頭とは。黄巾の世の人らまを黄巾の賊と号すと張角とて
 四五十万の勢を得て在る所。火を放ち人の財宝とて
 取らば。地頭官吏も防がず。やうやくとて逃ぐれ。と
 騒動もあらむ。大將軍何進とて。帝よ
 奏し。諸所の守護職を命じて軍勢を催促せしむ。盧植皇
 甫高朱雋三人を大將と。三手よらち追討せしむ。是を

張角が二軍。幽州燕州の界を。手痛く犯し。大守劉
 焉を討つ。校尉鄒靖とて。命。諸所高榜
 を立て。忠義の兵をよほし。そのう。涿縣の樓桑村とて。お
 よ。一人の英雄あり。是人はぬ言とて。禮とて。人よ。下り喜
 怒色よ。あらむ。天下の名あり。とて。女を。とて。大あり。
 身の長七尺五寸。西の耳肩。左右の手膝。とて。目
 と。漢の中山靖王劉勝の後胤とて。
 景帝の玄孫あり。劉備字の玄德。父を劉弘とて。幼は
 と。喪。母。車。孝とて。自ら。復。賈。織。家
 業。と。舎の東南の方。入る。桑の木あり。高五丈余。は
 こと。望。重。と。車。畫。の。往。来。の。人。此。木。と。見。と。

尋常のありさりとて李定と云ふ人は是れ見よ此舎のうらやみ貴人
 を出さんといふそのとやふ年二十八歳ありて天下の黄巾の賊鋒起
 て國のより忠義の士どもあんと聞て自ら出て州郡のより高橋を
 誦長嘆と段らんとするも後より大なる聲とあびて大大夫の
 士國のたをよ力ま出さざりて何事なるも長嘆と云ふも詞ま
 うらやみのあり。玄德此と後とてんまが其人身の長八尺約頭環
 眼燕頤虎鬚聲雷のてく。勢あるも奔馬の似たり。と云ふはま回
 て其名を問が答と曰く。某は張飛字の翼徳といふもの世に
 涿郡に住居し。と云ふの田地と持酒と賣猪と屠と家業と。
 專ら名ある人と相交り。今此とてんまの足下の高橋の下
 へ長嘆し。のふまらんと。と云ふ如何なるものぞ。玄德の曰く

いままは流落されども。と云ふ漢室の宗族より劉備字の玄德と
 いふもの。近きは昔市の賊志あり。州郡を掠りあひたり。は
 我まれば平はく社稷を扶けんと思ふも力の足ざるを恨むるも。
 張飛と曰く。よくと云ふは合り。その美ありが我は従ふもの四五人
 あり。と云ふ志に在あり。と云ふ大儀の計畧をわんご。伴あり。玄德の家
 へまきたり。酒を飲ぶ相儀と云ふや。又一人の男来り。一輛の車を
 酒店の門外より入る。内より桑の木の下に坐す。家主とよんが
 酒を買ふ玄德の体を入れば。身の長九尺五寸。鬚の長二尺八寸。
 面の重東のまき。唇は抹朱のまば。丹鳳の眼。野蚕の眉。相白
 堂く威風凜凜。と云ふ。心入る。と云ふ名を問ふ。合と曰く。我
 河東解良のもの。関羽字の雲長。始壽長といふ。先年郷の

豪雄勢力のよりて我を侮し也。我はこれを殺しては湖の
 いづれに流るるなり。今黄巾の賊蜂起して國
 家の守護英雄の士を招く。我此の事ありたり。玄德大に喜び
 我志ざりの程を詳らるる語りけし。関羽天の助なりと喜ひ
 共々張飛が家をもきて義兵を起さるるを議し三人の内は
 玄德年長トたしかむ二人再拜して兄とて張飛がいとく我宅の後
 がる所の園に幸は花の盛なり。明日白馬を宰して天を祭つ
 烏牛を殺して地を祭り。三人生死の交りを結むんといひに玄
 徳関羽あつるごとと同ト。次の白柳の園に出で金銀銭を
 ばらぬ牛馬をころすと天地をまの共は再拜して誓せ曰く
 今此三人姓氏異なりと云ふとも結んで兄弟となり心

を合せ力を懐せし漢室を扶け上ハ國家を報し。下ハ萬
 民を救ふ。同年同月同日は生るるを望む。願くハ同年同
 月同日は死人。自皇天后土この心々照監し。若義は背き恩
 と忘るる天人共々誅戮せむとて。祭りたりて玄德を兄
 とし。関羽次と。張飛をその次と。共々玄德の母を拜し。其
 後御の内にて賊立する者共をあの免柳の園にて酒宴し。
 三百余人は及びけし。明日より旗を擧んと義を以馬一匹も
 るけし。如何せん。と案ぶる。あは誰と。いふ。彼十人あつれど
 く馬を引せたる人。此と云ふ。向ひまると。Pを。玄德の曰く。我
 天物を助るなりとて。共々出で此を見れば。中山の大商人は。張
 平。蘇双と。いふ。若二人あり。毎年北園は。以て馬を商がいけ



玄徳天地を
祭つ桃園よ
義心

張飛

関羽

関羽

関羽

賊徒路を塞いで住家をなすはるるの空しく故郷に
回るなり。玄德む久へく酒宴をなす。逆賊を退治して漢室を
助るの由を語りければ張世平、蘇双其志を感し、駿馬を十
匹、金銀五百兩、鉄一千斤を贈る。玄德是をうけて、良巧の三振
の劍を拵せ、関羽の重さ八十二斤の青龍の偃月刀を作り、
冷艶鋸と名く張飛ハ一丈八尺の蛇矛を造りて、甲盔まで
一齊に備りければ、さらむ尉を廻さざらち立とて其勢五百余
騎まで幽及び到る大守劉焉大に怯び其姓名を問ひ漢室の宗
親なりとて家の系緒を語りければ劉焉はなを敬い相親
むり、叔姪のごとけり。黄巾の賊徒大方程遠志といふ者、五万余
騎まで涿郡を犯し、大守劉焉乃ち校尉鄒靖を大將と

し。玄德を先陣とし、少向て戦しむ

劉玄德破黄巾賊

玄德五百余騎まで、なち大真山の麓に推よせらるる賊軍、方
余騎まで陣勢を張、玄德ハ関羽、張飛を左右となへ、関の
逆賊がんと早く降らざるを呼えりければ、賊の陣より副将鄧
茂といふ者、馬をとばしてきて、張飛眼を怒らして、虎鬚さ
うさば、まゝ大ハの矛を舞として出む。只一合して、鄧茂を馬
より突落し、首を取て、徐とらり、大賊の大將程遠志大に
怒と斬て、関羽是を見て、八十二斤の青龍刀を提さ、
馬を躍らせて出ければ、程遠志其勢は畏れ、退んとするを、
羽一刀に斬て落さ。賊軍大將を討し、皆降へ、大は、玄德らち

取りたる首を路の岐は鼻させ功を収て函刀はより太守劉焉よ
ろこんで出む諸軍を厚く賞するは青刀のより早馬あり
太守龍景急を告ると報りければ大は怒りき牒文を披え
黄巾の賊徒城を圍入る車まで急なり兵を真し七後攻を
せよとがり劉焉乃ち玄德を喚んで如何せんと議するに玄德
の曰く某願くは行て救入劉焉大は喜び鄒靖は千余騎を
披け玄德を先手として青刀を救にも玄德の一軍とて賊
の陣ぢらく推よを其体を窺ひ益く鬚をみだして黄な
る縮まて額をつみ八卦の文をちて證じ救の来を見て引分て
あれを拒ぐ玄德は百余騎にて入乱れて我れも賊は目よりま
る大勢よて新手をへうつく拒ぎしうの玄德戦い屈して三十

里引退き関羽張飛と相議し一方勢寡しと勝りあこ
む明日奇兵を出して賊をやぶらんとて関羽は千余騎を
付て山のたは伏し張飛は千余騎を付て右は伏し左は
金を鳴きを相益と約し次の日鄒靖玄德一軍を誘りて
推よせられ賊の大勢南のわがめくよきそい蒐り喊のこ
る大は震て玄德をらく戦ひて詔りて退きければ賊
軍急は追きたるをむに山の迫りちうづき玄德の勢一度は金
を鳴りければたは関羽右は張飛二手は分れしけり生三
方より取巻たり賊軍大は破れ四角八方は逃ちりたれば玄德
きゆひは乗る青刀の城は殺到すと城中より是を又た
守龍景門をひらいて出て出たれば賊軍は後を度なき

右佐佐木住は落失く青の圍みたちまらば解はる大守
大の喜び重く諸軍を賞けけし鄒靖軍を収く函はな
回らんとせぬ女徳とせしるは中郎將盧植勅命をラ
けて賊の首將張角と廣宗よて我ときひの我昔一公孫
瓚と共に盧植を師とせり今ひて力を合せ共の賊を平く
かす鄒靖が白く某いは主の命を度せしむ野こく由
くり叶はば足下若らむる兵糧のまらぬ一を幽の
勢某ことやく收るらる女徳よとあや手勢も百余騎
を引て廣宗よ到り盧植よ入て右の趣を語りし盧植
大よ喜ひ重く賞と手下よ留む此賊の首は十々の候
よて廣宗よせし女徳よの兵と目えく攻戦い未基

くしき勝負もかろりし盧植即ち玄徳よ向て曰く此
の賊軍みだり要害よ引しもりたき急は勝負いあぶら今
賊の弟張梁張寶二人潁川よ在て官軍皇甫嵩朱雋と
相戦ふ今亦はよ千人余騎の官軍を借とがしよ是よ
と潁川よ引て戦を扶けむ玄徳よなるまら牒状を請取千
五百余騎よて潁川よ向る此時皇甫嵩朱雋賊將張梁
張寶と扱み戦ふりねなよ及び賊の勢も負て長社と三
小所よ引退き草木の深き所は陣を取らし皇甫嵩手
の勢を忍で敵の法は理し諸軍よ扱大把を持せ夜の三更のこ
ろ四方より推しせて一度よ必をうけ喉をせらるとははれ
風多はて火燭天を焦し賊の勢其上を下とせし馬の鞍

をく暇もなく。八甲を被るも及むと。十方の散乱せぬ
張梁張寶。這てのがれと走りぬし。向より一彪の軍馬を
か。紅の旗を指ても出ず。先は進む。又これ一人の英雄身の
長七尺。細眼長鬚。膽量人のをぞ。謀衆よある。常は齊
桓晋文匡扶の才なきを笑ひ。趙高王莽。後横の策少
なきを嘲けり。兵法は呉子孫子。又芳らむ。沛國譙郡の人。
曹操字は孟徳。小字を阿瞞と稱し。又右利ともいひ。乃ち漢の相
國曹参より二十代の後流は。大將。廬曹高が嫡男なり。官騎
都尉。封らる。今黄巾の賊を破えとて。夜軍。千余騎。とて馳
たり。路を塞いで。我ひ首を取り。一万余級。馬物の具をうつを
いぬ。皇甫嵩。朱雋。よ入。一手は賊と。逃る敵を。追覓る。玄徳

此の頃。穎川に。素り。賊の破たるを見。入。皇甫嵩に見。廬
植が。牒状を。出。し。皇甫嵩が。曰。く。今賊軍。大。破。て。走
たれ。必。も。廣宗。又。行。て。張角。と。一。手。は。ぬ。ら。む。也。沛。邊。早。く
馳。り。る。廬植。よ。力。を。合。せ。て。急。る。も。な。ら。し。玄徳。是。の。因
て。又。廣宗。を。せ。て。引。き。も。と。め。よ。り。二。三。百。人。の。兵。共。罪。を
車。に。載。て。出。ま。る。玄徳。た。ま。を。ら。し。と。怪。む。近。く。な。つ。て。出。を。り。を
乘。た。り。罪。人。の。中。郎。將。廬植。ち。り。た。り。玄徳。よ。り。下。し。其。由。を。問。ひ
廬植。は。涙。を。流。し。て。曰。く。我。等。は。廣宗。に。在。り。張角。を。と。り。か。し
み。な。く。我。の。勝。た。る。が。張角。は。も。の。術。を。か。か。る。ゆ。ゆ。未。益。も
破。り。ぬ。と。近。こ。う。黄門。左。豐。と。い。ふ。者。勅。使。せ。て。我。の。我。は
賂。を。と。り。た。る。と。云。ふ。有。我。軍。中。の。金。銀。と。か。ら。し。て。賂

使は献まるるべき物ゆゑと答ふ此よりして大豊ふりく
我を恨む。帝は説く。とねく我を罪は落す。わくの如くは
捕て董卓を大将として廣宗の賊を退治せしむ。張飛も
あはび大に怒り。守護の武士を殺して盧植を救んとひり免き
し。へ玄徳急は止色て曰く。是天子の勅命なり。汝なんぞ躁
き。関羽が曰く。今盧植友を殺ら。我等不如涿郡を回れ。か
玄徳はしは保ぬ。兵を引く進む所は。忽ち山の後。又喊の音き
こへ。馬烟悖しく起りし。岡の上は登じ。ことを望む。廣宗は
て夜軍。我員ぬと受く。黄巾の軍勢。天公將軍とある。旗を先
に進め。官軍を追蒐る。なと。へ玄徳の曰く。是は張角が勢
なり。夜軍を救へ。と。をうらふ。ま。とて関羽張飛と馬の鼻を

ららぐ。討て出れ。張角が勢。大に驚き。と。と。敵の伏撃。か
蒐。後。を塞。と。おと。我。先。よ。と。引。回。へ。へ。玄。徳。い。や。と。
んで。賊の。勢。を。四。角。八。方。へ。ち。ち。ら。ら。又。十。里。あ。は。り。ぞ。追。う。ひ。たり。
董卓は廣宗の戦。ま。は。て。賊。軍。は。追。ま。は。る。か。誰。共。し。ら。と。一。手
の。勢。打。て。出。れ。賊。軍。を。う。の。ち。ら。ら。ぬ。と。報。し。へ。へ。玄。徳。は。回。り。て。玄。徳。
對。面。し。れ。了。て。今。如。何。ち。ら。る。と。問。玄。徳。友。佐。ら。き。由
を。答。ら。し。へ。と。董卓。甚。だ。う。ら。ん。と。了。し。は。恩。賞。を。ま。ら。し。へ。と。
張。飛。大。に。怒。り。我。等。血。を。流。し。て。大。敵。を。破。り。彼。が。卒。き。し。命。を。
救。の。ら。る。よ。と。恩。賞。こ。と。な。く。何。と。て。お。の。の。び。く。は。あ。ら。ん。と。答。
ぞ。我。ら。の。賊。を。殺。せ。し。と。て。矛。を。舞。し。て。入。と。と。を。問。羽。急。に。
引。留。め。玄。徳。諫。へ。し。ら。し。ら。り。彼。ら。を。さ。き。お。進。の。臣。味。は。

許多れ軍馬を領せ我ホ若こきを殺せらるらむらむ謀
人と呼ばるるが。不如あ乃あ留るがらむらむとして其後兵
を引具して朱鳥が陣へ趣きける

安土喜縣張飛鞭督郵

玄徳兵を引く。朱鳥が陣は加りしは朱鳥の喜びやうて
先陣として賊の張寶が陣へせらるに賊の大おの鼻を
老馬を生してきつてうらひれ張飛矛を築て二三合抜ひ馬
下は斬ておとせとてあまの鼻をわけて一交は賊を化と改入
れ賊の張寶馬の上にて髪をさき手は劍をとりて口は文
を唱ふるは俄くは風雷鳴をたえき黒雲の中より人馬怪しく朱
鳥の乗りと付てける官軍大をさざらき散るる

賊軍勝は乘て掩殺すと玄徳敗軍を収め朱鳥とけりを議せらるよ
朱鳥が曰くあは妖術なり何を怪まらへ明日羊猪の血を携へ
て兵を山の頂きよ伏せ賊の勢れ追きける爾一度は洒ぎかけさせ
て此法より破らむと破らむ。玄徳こきよ後づり。又百の勢は羊猪の
血を携せ其外多く穢き物を用意し。山の上は伏せと。次の日兵
を進しれ賊の張寶。又髪をさき文を唱ちるは風雷天地
が震動と。砂を捲き石を走らせ黒雲の中より人馬の多くが
ゆくは付くはれは玄徳急より退く賊軍大を退とこよらむ
の路を通るは一声の鉄砲ひびき。又百は友軍ひびくはては
るものを洒ぎしは勿心ち空中より或は紙よて他ける人形草を束
る馬なれと。終て地は落風雷自ら息よる。賊軍法の破たる

安土喜縣張飛鞭督郵



見て退くとせむれば、張飛が一軍討て出散ると操は、張討てお救をせむ。張
 寶ハ一方を守破り、路を奪て走り去るを地公孫と忠義を
 を目つけ、矢を射り、張射しちがら陽城へ逃まり、堅く守りて出さざり
 寶たの臂を射し、張此日の合戦は賊の勢三万余人討し降る者救をせらば、官軍
 陽城を圍み、日夜息をせぬ、攻め共要害堅固より
 張梁と我ふ勝負をせむに、使わがて敵り来り、董卓勅令
 を受て、張張梁と我の多官軍、毎度は利を失ひ、張帝又皇甫嵩は令りて董卓は代りせぬ、皇甫嵩兵を引

て、張向ひければ、賊の首ぬ張角、張弟張梁、王者の礼を以て
 是を葬る、皇甫嵩、張手を引て速やうと改り、七度まで戦勝て
 張梁を曲陽にて切殺し、張角が墳を掘て其首を洛陽
 へ上せしむ、降る者十数万、討れる者お救をせらば、張功を依り、皇甫嵩は車騎將軍、益々の牧を封せられ、武騎校尉
 曹操も今度の忠戦より、濟南の相を封せられたり、語り
 けむ、張朱鳥是をちて早く此城を攻落して、張預れとて大軍力を合と、切とも射せむ、張勢は激政といふ者、張寶が首を取、城を用て降し、張こまを平定して、洛陽は奏聞と、朝廷の百官こまを

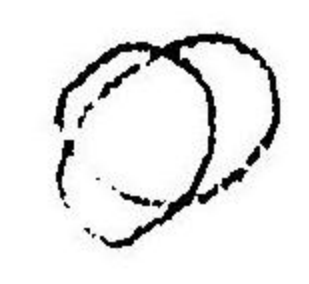
朱鳥の官爵を賜はらんと相議する所は必ち南陽の
 早馬さたり黄巾の余黨は趙弘韓忠孫仲といふ者三千
 万余騎の益者を集めて郡を動乱せんと告げしは群臣
 又奏して曰く朱鳥今陽城を平げて其勢六方は余れり是
 を用て討めんとす即ち詔を布ては朱鳥なる
 は宛城に到る賊の大將趙弘この由を先韓忠を出して
 をを防がしむ両方の勢みちる廣野はと陣を張玄徳真先
 りとみ鼓を鳴し賊を化して是の戦の辰の刻より午の刻まで勝負の
 色入らざりしに朱鳥自ら精兵をせめて二万余騎の東
 山より蕙りたる賊軍後を塞しんと思ひ急は引退く而を玄
 徳大はとみ必んで攻めし賊軍討ちおねをくは皆我

先は宛城へ馳りし官軍四方を圍んできびきり水も通せ
 ざりしに朱鳥自ら精兵をせめて二万余騎の東
 山より蕙りたる賊軍後を塞しんと思ひ急は引退く而を玄
 徳大はとみ必んで攻めし賊軍討ちおねをくは皆我
 て降参せしむるを頼ふ朱鳥は怒りて急は城をばはれし
 玄徳諫て曰く昔漢の高祖の天下を得たは能降参のふを
 用ひてふあなる今賊軍降くと望む將軍をばはれしを
 朱鳥笑く曰く此は天の附は依もろと昔秦のむを
 たして項羽が如き軍たがひと卒そらて天下は定まらる君ら
 高祖はのむは降参も老は如何なる能はれしむり今に海
 一統のむは黄巾の賊の禍をらむ若其降参を許さば何を以て
 善をせんと賊徒はのまは悪逆をぬと利を失ふ附は即ち降
 参して身を恙なくせんとならは是を長き道のちら我

かゝる根を絶んとせむ。玄徳其論を服し、又若て下されば、今この城を四方より密に圍む。一人も余さざれば討んとせば、彼必し一圖は志を合せて討死をば。万人心を一にして戦つ。味方も若しとてぶなぐ。大敵をば用く攻むこと利ひ、其逃る所追らちして勝りを得ん。朱鳥屯と同日、東南の圍を解て西北より攻たり。案の如く城中の軍勢は先と東南の門より逃走る。官軍勢は乘て追うけ散て、攻れば賊將韓忠既、朱鳥を射殺する。浩、亦趙弘、孫仲、大勢を引く。馳まり追手の官軍を、さて火を散て戦ふ。朱鳥賊の大勢たるを見、少く引退とす。然れば賊軍は氣を得て、瀾のほとり、如くは、又宛城を取返す。官軍若し討れ十里退く陣を取り、其日の暮がた、東の

方より一彫の軍馬馳来り、真先よとむ。廣額、潤面、虎態、熊腰、吳郡、富春のふ、孫堅、字は文臺とて古の孫子が未葉ちうね、べ、辺、功、ありて此、射、下、邛、の、丞、たり。昔、巾、の、降、起、を、せ、て、淮、泗、の、精、兵、千、五、百、騎、を、引、て、官、軍、の、力、を、破、れ、朱、鳥、ちう、を、喜、び、便、ち、孫、堅、は、南、門、を、攻、せ、玄、徳、は、北、門、を、攻、せ、て、自、ら、西、門、を、攻、て、態、を、東、方、を、圍、は、む。大、敵、の、心、を、一、よ、る、さ、で、い、ち、よ、と、く、走、ら、し、め、ん、と、討、つ、者、ち、う、り、孫、堅、は、此、日、射、手、な、れ、む。目を醒せ、不ど、一軍せんと、自ら馬より飛んで下り、やうと、壕をころぐ。城中は登り、入是を討入して、城中の勢がひし、と集り、るを孫堅、刀を弄して、目の前の敵、二千余人を斬殺し、残るものを八方へ追ち、ら、し、め、ん、と、討、つ、者、ち、う、り、孫、堅、は、此、日、射、手、な、れ、む。

安土法縣の及ぶは、以て縣中の政を治めらる。二月をり有て
 人氏みら其徳はなほき。今手を強盜惡逆の名を取りた。我老も
 己と羞て心をひめ良民とありて服し。り。玄徳へ関羽張飛と
 食する。附へ卓を共み。一。床を同し。四月は。うも。をぎ
 ける。不も天子の郡。部をわ。此度。黄巾の賊を平らげたる
 軍功ありと詐て内縁あるんを頼。を。櫻り。官爵を受た
 る者多。能く。はれを。ふま。と。觸ら。は。安土法縣へ督
 郵。来。し。玄徳。遠く。出。遣。へ。地の上。に。礼を。み。し。は。督郵馬の
 上より。鞭を。指揮。して。回。答。す。関羽。張。飛。を。た。ら。は。ま。其。其。礼。を
 を。見。て。齒を。く。い。く。を。と。り。と。も。敢て。詞。を。出。さ。ず。相。隨。て。館。中。に
 到る。督郵。少も。懐ら。む。は。面。を。さ。す。坐。し。は。は。玄徳。慎。で。階。を。よ



侍立。も。二。村。を。り。有。く。督郵。問。て。り。る。は。玄徳。へ。由。來。如。何。な。る
 人ぞ。玄徳。答。て。曰。く。某。は。中。山。靖。王。の。後。胤。也。と。涿。郡。の。黄。巾。の。賊
 を。平。げ。三。十。余。度。の。戦。を。る。て。此。縣。の。尉。を。除。せ。ら。る。督郵。大。に。叱。り。
 汝。が。如。き。賤。し。き。者。が。詐。て。天。子。の。宗。族。と。稱。し。功。勞。も。な。く。て。官。爵
 官。爵。を。盜。む。是。は。因。り。天。子。我。れ。勅。し。て。沙。汰。し。ふ。さ。せ。む。よ。と。い
 へ。は。玄徳。默。然。と。して。退。き。下。吏。を。呼。び。て。督郵。威。を。み。て。入。を
 畏。ま。し。い。ま。る。か。ぞ。と。問。ふ。下。吏。答。て。曰。く。此。賂。を。取。ん。為。り。玄
 徳。の。曰。我。民。を。治。め。て。秋。毫。も。犯。さ。す。ら。し。何。ん。ぞ。彼。の。賂。を
 錢。あ。ら。ん。や。と。て。了。し。賂。を。よ。る。と。り。一。の。目。督郵。其。賂。を
 き。を。怒。り。下。吏。を。召。で。玄徳。櫻。り。民。を。害。す。と。詐。狀。を。出
 せて。請。取。け。り。玄徳。自。ら。館。門。に。到。り。内。へ。と。ま。し。は。督郵。の。若

共許さざりて、徒に退きりぬる心の内安らむ。おふく張飛の酒を飲で、後只一人馬よまのり。館門の前をまどぎらるる。羊老たる百姓共五六十人泣居たりしれ。いさるあぞと向ふ。谷て曰、督郵まいるのを取ん為。縣吏を召て、許状をおせ。天子は奏して罪なき。よ。玄徳を害せんとす。我ホこよ来り。其るを告て。玄徳の恩徳を露さんとま。い。館門より内よ入り。あ。ち。び。却てさ。び。まらち。共。さ。い。し。り。張飛是をす。ち。大。怒。り。牙をうんで。馬よりとびをり。直ち。館門よ。走。入。る。番。の。者。共。是。を。入。下。と。て。益。集り。る。を。張飛。四。方。へ。追。ち。ら。り。堂。中。よ。入。り。見。し。バ。督郵。す。坐。り。て。縣。吏。を。責。張。飛。雷。の。如。ち。る。声。を。励。し。て。民。を。害。さ。る。逆。賊。此。張。飛。を。見。え。ち。と。や。と。叫。び。虎。鬚。倒。よ。上。り。て。怒。り。眼。百。練。

の鏡の如くちりしれ。督郵大よをどろき。左右を。と。捕。んと。ま。る。よ。張。飛。力。足。を。失。し。て。ち。り。せ。く。奴。系。を。踏。倒。し。張。飛。ち。り。て。督。郵。が。髻。を。掴。入。で。中。提。け。憎。き。こ。り。よ。く。も。け。不。来。し。る。と。さ。めて。門。外。よ。鬼。て。出。傍。ち。る。柳。の。木。よ。綁。あ。げ。自。ら。柳。の下。枝。を。お。て。督。郵。が。腿。の。あ。たり。を。は。げ。け。二。百。打。け。れ。柳。の。大。枝。板。十。本。を。打。を。り。り。玄。徳。へ。落。り。と。も。ち。ら。る。俄。か。小。物。さ。か。か。く。張。飛。何。り。と。と。向。よ。一。人。走。り。来。り。て。曰。く。張。飛。酒。を。お。い。入。を。綁。と。痛。く。鞭。ら。た。今。か。定。て。打。殺。し。や。ひ。の。ん。玄。徳。も。あ。へ。び。走。り。は。て。是。を。見。し。バ。張。飛。が。怒。り。叫。声。休。ま。督。郵。を。柳。の。梢。よ。釣。あ。げ。ち。り。玄。徳。大。よ。驚。馬。て。色。を。失。い。し。い。さ。る。あ。ぞ。と。向。よ。張。飛。大。息。は。い。と。曰。是。ホ。の。賊。の。民。を。害。

安喜縣あんきけん
張飛督郵ちやうひとくゆう
鞭むち



張飛

督郵



曲者なり。打殺さざんべ心ありとて。又大なる杖を振上り。
 打擲も督郵木の上より玄徳を見はけ。昔けさるる言にて。
 玄徳公願く一命を救ふ。玄徳仁慈の心深し。急は張飛
 を推とむ。羽は山に馳來て曰く。兄とて。莫大の功を立
 ながら。一縣の尉は除せらば。今又督郵を殺せらる。某思ふ。
 荆棘叢中の非。青鳳之所栖。ちる督郵を殺して。故に。
 別り。別に遠大の計をみ。玄徳よ。は。従の印綬を解。督
 郵が頸よりけ。汝の民を害さる。賊。今首を刎んぶ。
 心よ。忍びざる。あ。此。官をさ。と。回。と。
 伴ふ。涿郡へ。其。百姓共。集り。督郵を斬。
 督郵。此。由。を。朝廷。に。奏。

兵を指。向て。玄徳を捕んと。し。玄徳の急なる。一。族。を。車
 の。せ。代。り。て。劉。恢。を。頼。み。暫。此。に。居。り。

何進謀殺十常侍

去程。昔。中。の。賊。滅。て。天。ト。又。静。ち。り。し。十。常。侍。へ。君。
 尺。で。専。ら。權。柄。を。と。り。共。に。相。議。し。て。こ。か。心。は。従。と。
 者。の。科。な。き。に。誅。殺。と。趙。忠。張。讓。二。人。今。度。の。軍。功。は。依。て。恩
 賞。を。預。た。る。人。の。方。へ。密。に。人。を。遣。し。賂。を。求。む。し。皇
 甫。嵩。朱。雋。二。人。の。曾。て。ま。る。ご。り。な。る。も。あ。や。が。て。天。子。に。説。し。
 が。昔。中。の。賊。を。平。ら。げ。て。功。勞。あ。り。と。や。更。に。實。な。き。に。
 威。四。方。は。及。ぶ。官。軍。招。さ。る。よ。あ。は。ま。り。賊。徒。自。然。と。滅。び。
 る。り。と。奏。し。し。帝。は。之。を。信。と。し。即。時。皇。甫。嵩。朱。雋。を。

を剥て趙忠を車騎將軍に封じ張讓亦其外の内官十三人を
 同時に列侯に封じ又司空張温大尉に昇り崔烈司徒に任ぜ
 らる皆十常侍に阿り附てよろづ私の多と公なる政道を
 かりしバカ棍の共目は長とて上下益く恨を會み漁陽の
 張奉といふ者謀りて自ら天子と称し弟の張純の大將軍と
 号と其外長沙江夏の賊徒諸郡は蜂起して遠近急を告ぐ
 雪の飛が如くなれば十常侍是をうくして天即太平ありとの
 奏しんる或曰帝後園より十常侍と酒宴しむいんば諫議太
 夫劉陶沛郡より来て大に勤く帝其故を向入り劉陶曰漢の天
 下のやらざる且夕あり陛下なす内嬖と樂みふ帝宣く
 今天下太平の目いつちる危きものある劉陶が曰く四方の逆徒

蜂の如くは起りて凡郡を掠め乱る其禍皆十常侍が官を賣
 民を害するに因り朝廷の徳ある人の隠し去諸侯の人辟目を
 張其禍目のホあり十常侍おきをきて皆冠を卸て後
 城流し大臣うくはごとく臣ホを疾んで害せんと願くは令
 を乞ふと故つて田の官をよと身全せんと哀みん帝
 大に怒て劉陶に向て宣いけるは汝が家も近侍の人を用朕
 かんて常侍の友ならんやとて武士は令とて首を斬る
 劉陶哀み叫び臣死せども何ぞ怕ん惜むや漢朝四
 百年の天下今日忽ち滅びんををとらて門外より
 附り司徒陳耽外より来りけり劉陶を斬んとすを
 是を止め官中へ入と天子に足る劉陶いなる罪あり

益く降人を出れば張舉もこの諸君を見く自ら頸を
益く死するもへ漁陽忽ちに平定せり。劉虞表上て玄德
の勲功ある由を奏しければ朝廷詔を下り。往日督郵を
打たりし罪を宥して下密の丞を封じ。又さる事の尉を遷る。
公孫瓚も表を上て玄德の功ありて。拔擢の功ある由を奏せ
し。乃ち那尉を別部司馬に任じて。平原縣の令を封せらる。
玄德恩加謝して平原に到り。此所の錢糧の用意澤山は
て。軍馬の備もあつる由。日比の家を直して。比びる。劉
虞へ漁陽を平らぐ功あり。因て大尉に任せらる。中平六年
夏四月。帝御不例の事ありて。日く重り。今つと志に老く。乃
ちれば密に何進を召て。欺めんと殺んと謀む。其故を委く

尋ぬれば。此大將軍何進。元末その身極めて賤き者なり。が
其妹天子を寵せられ。貴人となり。故に其身大將軍上
て。天下の兵權を取。弟の何苗も執金吾に封せらる。去ぬる光
和三年。何進が妹何貴人。太子劉辯を産り。是は因て此のよ
皇后にあらる。何進は皇后の兄なる。因ていよく権柄を取。け
り。其後帝又王美人を深く愛し。必ひて此腹に劉協と云る
る皇子が生またり。乃ち何皇后是を妬んで。了る。王美人を鴆
毒にて殺せり。此のよ劉協は董皇后を養ひ。己は太子劉
辯。年九歳。乃ち母を失ふ。帝より。帝は思召。父弟の劉協
は天下を後んとて。常々近侍の臣に宣はれ。十常侍并は
門塞。願ホヒそり。奏して。乃ちける。若劉協は天下を後んと

巾のしぬ。先何進を除き。皇太子劉辯。何進が妹の腹より
 来たれ。何進兵權を專らして。そのよへ劉辯を君とせ。今
 陛下御榻より。是よりを記跡のり。今入して。何
 進を宮中より。兵を伏して。殺し。其後劉協と。其
 後の禍ある。帝より。因て。何進を。何進は。私
 語て。内へ。入る。十常侍。兵を伏して。殺さんと。謀り。と。若し。私
 何進を。急ぎ。門より。引る。百官と。私宅より。あは。あ
 て。十常侍を。誅せんと。議と。何よ。未坐より。一人と。み。出内。其の
 勢。い。ゆる。中。帝。實。帝の。討。り。相。つ。ゆ。で。朝廷。は。滋。息。を
 何ん。と。益。く。滅。せ。り。を。い。ん。若。計。を。仕。積。ら。る。ば。あ。て。大

ある。禍を。めん。よ。子。細。み。あ。む。へ。と。云。れ。バ。該。人。あ。れ。を。見
 よ。典。軍。校。尉。曹。操。なり。何。進。笑。と。ゆ。る。ハ。汝。小。輩。い。は。ん。ぞ。朝
 廷。の。あ。り。を。い。ん。懼。り。多。言。せ。る。ゆ。え。ハ。何。潘。隱。を。り。来。り。
 天子。今。嘉。德。殿。に。崩。れ。お。る。り。十。常。侍。は。皆。以。意。て。人。を。い。ら。せ
 せ。先。何。進。を。宮。中。へ。召。し。後。の。禍。を。除。き。劉。協。を。立。て。御。位。を
 繼。ぎ。ら。ん。と。定。め。て。使。来。る。が。一。と。云。ら。る。ゆ。え。忽。ち。勅。使。来
 り。天子。と。て。是。を。危。し。早。く。何。進。を。召。し。て。後。の。り。を。託。し。後。を
 云。ら。れ。バ。曹。操。が。曰。く。今日。の。計。先。君。の。位。を。正。て。其。後。の。賊。を。誅
 せ。何。進。が。曰。く。誰。が。我。を。為。す。君。を。正。し。て。賊。を。討。ん。何。一人。と。あ
 出。て。曰。く。某。願。く。ハ。み。千。の。精。兵。を。率。一。劉。君。を。冊。せ。と。云。ふ。
 益。く。内。者。を。誅。せ。ん。諸。人。の。言。を。い。ん。其。人。自。相。慰。律。行。歩

何太后
董太后



董太后



何太后
董太后
宮中

何太后

威のりく四世三公の登り門下の故吏多く武藝群を起す
南汝陽の人より漢の司徒袁安の孫袁逢が子より袁紹字
本初と号す司隸校尉あり何進大よりさびらまへ袁紹
まびく鑑て御林の勢五万余騎を率いてたち内裏
より四方を出入りて通さる何進の何顯荀攸鄭泰
あんとり入る大臣三十余人をともあひ相續る宮中より空
帝の柩の前より太子劉辯を帝位より即なすのり百官を
万歳と祝する袁紹共々下知して内官を捕して塞頭と
ては内をぬるもやめしむる討て出で拒むるも袁紹討て
しく蒐りしむるの威を怕きて國の内へ逃入り花の陰より
りて中常侍郭騰を討て斬死し首をとるは上りの

袁紹もあつ何進もあつ内官もあつ塞頭もあつ
一人のあつ殺し一人のあつ後入るの害もあつ
中常侍の言もあつ何皇后の宮中より行声も
あつ哭きもあつ討てもあつ大將軍を討てもあつ
塞頭一人が所為もあつ其あつとつて誅せんもあつ
あつ者と言もあつ其あつとつて誅せんもあつ
哀もあつ助もあつ何皇后の宮中より行声もあつ
あつ何進もあつ宮中より行声もあつ
家より出てもあつ栄華も得るもあつ中常侍もあつ
あつあつ。塞頭もあつ誅せんもあつ他人の誅せんもあつ
内官もあつ殺しもあつ中常侍の誅せんもあつ

のなる何進外は出百官より其の塞頓もまて害せんを計り
 し。今まざる誅せらる。その余の内官もとも罪あり一人も
 殺さざるを哀詔曰く今日草を刈て根を除きんば後大ある
 害もあらず何進は曰く今日草を刈て根を除きんば後大ある
 と斬んと。百官といひていつく退去せしめ何太后朝坐て何
 進録尚書事す。百官といひていつく封賞めり。如君をな
 けく政事と治るまは董太后のひてまひ。ひて十常侍を宮中
 に置き。まて何進の妹とてり。先帝まて。今日の子
 劉辨帝位に即く内外の群臣もあまふ。す勢ひを益
 へる王美人の腹に生まる。劉牧を養て子とて先帝も常
 劉牧の位を嗣しん。なる。まて問なる

張讓亦奏く曰く太后の朝廷に出く。讓てなる。政と聞
 なる。國舅董重と武官を其に。なる。なる。
 なる。權柄を。何進も威勢を奪へ。董太后是從
 ひ次の日朝廷を出て。政を。劉牧を陳留王に封じ。董
 重を驃騎將軍に封じ。十常侍も高官を。天下
 政事と決り。何進は。一月を。權柄
 へて。董太后の。天下の政事との裁断を出せ。なる。
 なる。何太后の。安を。宮中の酒宴を。なる。
 董太后の。半酣を。再拜く。なる。
 なる。女の身を。朝廷を出り。政を。なる。
 なる。皇后推を。却り。九族を滅せり。なる。九重の内を深

居り朝廷の政々太老元臣の事を以て四海ののろふ太平ありと
董太后の怒り曰く汝荒淫しく色を妬み王美人を鸩毒しく死す
汝が子天子を以ておぼしめし何進のつとめを大将軍に任ぜらるる感
事なきもいへあり汝みだりの舌を動かしはるるありと驃騎將軍命
曰く汝が兄の首を斬らん何太后の声やあらば曰く汝言を
恭らしく汝をさしむ汝のあらざる無礼の言を吐せし董太后の
く汝のいと猪で屠沽したる家を生かすあるの知恵のつとめ口を
ぞと二人をめぐり悪口をはらみあふる風情ありはるる張讓亦董
太后といひて官中へ回る何太后その夜何進を召はせし事の
計を宣げ何進を召はせし大臣の事と評議する董
太后河間より召はせし事のつとめを以ての義なきを以て董

太后及郡の交通して財利を貪り女の身も政々貴爵
私てあはれり沙汰して董太后と河間を許し置三千余騎を
驃騎將軍董重と討んとくその家へ出でし董重を以て顔志
ゆ後堂に死せし十常侍事の叶はるる金銀珍宝を以て何
進が弟の何苗をたたくその母の舞陽君を以て賜とあはれ何太后は
用ひざるごとく頼り巧言を以て無事あるごとく得たりその年の
六月何進はるる鸩毒を以て董太后を死せし文陵を葬り司隸校
尉袁紹はるる告ぐ曰く十常侍のつとめを以て傳へ將軍の董
太后を死し入る天下を奪の企ありと沙汰せしその年の
官へ入るのつとめを殺し入る後大なる害をあたへし賈
武の計を以て密に却てその身と滅せし將軍兄弟

御林の軍と統帥の手下の英雄の大將あり。事あるに當りては、
天の助るるあり何進が白く、如是一日と定むるに、
十常侍の事とは、何苗の賂し、頼るるに、
何太后の宮中入り奏して曰く、大將軍は新君を佐あがら仁慈
と、天下を治るの思想を、人々を誅せんとて好む、四海太平
あるに、十常侍と誅せんとも、亂と招の道あり、早く誅めんと
ひ、何太后も、何進とて、内官の權を執り、漢家の旧規を
先帝近比崩し、内官を誅せんとも、社稷を重
んずるの道あり、決するの事行ふに、何進は、外
の大名を好む、内官の決断ある者、兎角の返事あり、
退生す。

繪本通俗三國志初編卷之二終

122
74
28

